

## 党の内外から——メキシコ人研究者の見たPRI——

ホセ・ルイス・レイナ

“神秘のベール” “公党”が結成されてから五〇年経過しているにもかかわらず、党についての研究がほんのわずかなさされてこなかったことに大いに注意してほしい。メキシコの社会科学者はメキシコ社会に負債があるといえる。党がいかなる機能を果しているのか、どの社会勢力といかなる利害関係にあるのか、あるいは、どの勢力と提携し、どの勢力に従属し、どの勢力から独立しているのか、これらの問題について今日まで体系的で説得力のある研究は全くなかったのである。

メキシコの国民生活に関心を抱くものなら誰もが“公党”はいかなる政治的役割を果しているのかと、これまでいくども問いもし問われもしてきたが、残念なことに抽象的で内容の乏しい回答を出すことしかできなかったようである。PRI——それは政府与党の窮極的發展形態であるが——を詳細に研究したものとなるといよいよ少ない。PRIの前・前身であるPNR (Partido Nacional Revolucionario) については充分に知られているし、前身であるPRM (Partido de la Revolucion Mexicana) についてもある程度知られている。しかしPRIについ

党の内外から——メキシコ人研究者の見たPRI——

(三三三) 三三三

てはほとんど何も知られていない。神秘のベールがPRIをつつんでいるのである。そこで次のような疑問が生じよう。なにゆえにメキシコ政治システムの最重要要素の一つについての調査が充分おこなわれてこなかったのか。この問いにたいして一応の説明はできよう。すなわち、内部にいてはじめて党をよく知りうるのであり(党内で活動した知識人が使うありふれた釈明であるが)、その他の方法でこの課題をやりとげるとはほとんど不可能である。そして党を知る目的で党に加わるのはあまりにも高い代価を支払うことになると感じる社会学者が当然いるであろう。政治家や活動家になれば往々にして客観的で厳正な立場を、とりわけいふべきことをいうための正当性を失ってしまい、自己に忠実でありえなくなるのではないか、と考えるのである。また、党に加入すること自体が知りえたことを思うまゝに発表しないという誓約をかわすことになるのだと考える社会学者もいるのであろう。そうすれば党派の規律にふれる危険があるのは最初から分っているのであるから。

党を害するためではなくただその理解だけを目的とした調査・研究でさえ組織的に拒否する何かが党内にあるにちがいない。メキシコ人社会学者にたいして党の扉はほとんど閉じられている。ところがメキシコ人以外には明らかにそれが開かれていて、ロレンソ・メイエルがすでにふれたように多くの外国人研究者が党内にもぐり込んでいる。もっとも、このばあいでも普通は外観をのぞかせるだけだが。おそらくこういった理由で、PRIを客観的分析の対象にしようとする意欲が時とともにうすめられ、PRIをとりまく神話と神秘のベールのみがふくらんできたのだろう。“小教法則”が事態をよく説明するように思える。つまり、党システムのカラクリについての知識が少なれば少ないほど、そのシステムの効率率が高い。あるいは——全く同じことではないが——カラクリについ

ての知識がふえればふえるほどシステムの脆弱性が増す。

「論評の方法について」 PRIに関する研究がいかにとぼしいといえ、ここでそれらに論評を加えることに意味がないわけではない。まず論評の対象となる研究を選んだ際の三つの基準を、いささか恣意的なのは承知のうえで、示そう。(a)公刊された研究だけをとりあげる。厳格な批判よりも礼讃に終始しがちな職業上の論文——決して多くはなく、政界に出ようとするものの手になるのだが——はふくまれない。(b)PRI自体の編集になる書物はとりあげない。その大部分が政策の表明や演説であって、分析や議論のかわりに美辞麗句を並べているにすぎないからである。(c)メキシコの政治システムと社会生活におけるPRIの役割を扱った研究を中心とする。

以上の基準から——やゝ独断的だが方法論的に大きなマイナスはなからう——ここで扱う研究を挙げると次の数冊でしぼられる。Vicente Fuentes Díaz: *Los partidos políticos en México* (Altiplano, 1956 y 1969), Mario Escurdia: *Análisis teórico del PRI* (B. Costa Amic, 1968), Manuel Moreno Sánchez: *Crisis política de México* (Extemporaneos, 1970), Berta Lerner: “Partido Revolucionario Institucional” (en Antonio Delhumeau, Comp.: *México, realidad política de México*, Instituto de Estudios Políticos, 1970), Pablo Gonzalez Casanoua: “El Estado y los partidos de México”,<sup>註</sup> 著者の経歴も視点もちがった異質の著作をまとめて扱うことになる。著者の中には、自らの夢を社会の中で実現するために政界に出ようと考えているもの、政治家を一時やめて次の機会を待っているもの、一貫して学界に身を置いているもののそれぞれが含まれる。彼らはPRIについてわれわれに何を語ってくれるであろうか。

(注) この著作の改訂版が、『El partido del Estado』として Nexos の本号に掲載されている。

“PRI が変わったのか、著者の見解が変わったのか——フエンテス・ディアスのばあい” フエンテス・ディアスの書物には二版ある。初版は一九五六年のものであるが、十三年後に内容を一新した改訂版が出された。初版では、長年にわたって権威を失墜させてきたPRMは一九四六年はじめ“すでに進められていた大統領選（ミゲル・アレマンの）に対応できる新しい組織としてPRIに生れかわらざるをえなかったと言いつ切っている。PRIは当然PRMの延長線上にあるのだが、他方では、大衆的基盤を欠いた官僚主義、硬直性というPRMの欠陥——そのために国家のたんなる選挙機関になってしまっている——を除去し、党を蘇生させることも必要であった（p. 72）と「党」の変遷を説明する。しかし、PRIが一九四六年の大統領選挙戦で大きな役割を果たしたとは考えていない。大統領アビラ・カマーチョ（Avila Camacho）がアンソーン（Miguel Alemán）を次期大統領候補として認めたことの方が党が“獲得しえたかもしれない国民の支持”よりも重要であったとしている（p. 73）。大統領の個人的権威の方が党が展開しえたかもしれない活動よりも重要であったと考えるのであろう。さらにPRIの登場は“決して政治的發展を示すものではなく、むしろ一党支配の政治システムが歴史的にはいまだ確立されていなかったことを示している”という（p. 74）。『著者は、単一の組織が——このばあいはもちろん「公党」が——政治権力を独占するような状態を容認せず、かりにそのような組織の存在を正当化する理由があるとしても、それはメキシコ革命の目標自体を擁護するため党内で十分に意見がたたかわれるときのみであると確信している（p. 77）。ところが、新しい版では党の果す役割を初版とは全くちがって理解し、それをメキシコの政治システムにおける

必須のものととらえている。党は「きわめて有効な選挙機関」として活動してきたばかりではなく、政治的安定維持のための最重要機関となっている (p. 268)。「これまで果してきた、また現在果している枢軸的役割を思えば、PRI をぬぎにしてこの四〇年間の「国民生活は考えられず、PRI が「社会平和の維持」のために果す役割はきわだっている (p. 287)。フエンテス・ディアスはPRI が「一九一七年憲法が生んだ制度」を支える能力を示してきたとも考える。時の政府とともに「国家の進歩と独立」の歩みを進めてきたのだから (p. 288)。結局著者にとって六〇年代のPRI は「国全体の主要な勢力」がその内部に結集しているから民主的なのである (p. 289)。党が継続的な自己改革を必要としていることは否定しないが、これまでもそれを充分になしとげてきたといいたいのであろう。

「題名どおりには理論的でない」 エスクルディアの書物はここで扱う研究の中ではPRI を直接分析の対象とした唯一のものである。しかし、副題に「理論的分析」とあるにもかかわらず党のダイナミクスを——あるいは静力学でさえ——充分に説明してくれていない。ロベス・マテオス (López Mateos) 政権の大統領府報道局長であった彼は、多様なカテゴリーに属する事柄をひとまとめに扱ってしまい、それらを分類しその間の関連を整理することができなくなっている。そのためわれわれはばくぜんとしたイメージを受けとるだけである。だが、いくつかの興味ある指摘を引き出すこともできる。たとえば、PRI の任務はメキシコ革命が掲げた目標を実現させることであり、そのためには「メキシコ経済のインフラストラクチャーを根本的に変革」せねばならないという (p. 51)。また、PRI の構造にも関心を寄せている。すなわち、三つのセクターから構成されているという構造上

の特質は各セクター間の継続的な意見調整を困難にしているが、その反面、重要な問題については各セクターが中心となって十分な動員を行なうことを可能にしている (p. 85)。そこに「あまねく知られた」党の動員機能をみるのである。更に、党全体がきわめて厳格な階層体系をなしていることを指摘し、下部から中堅層、幹部まで各レベルの「黨員の意見をざっと調べただけでも」次の事実がみてとれるという。すなわち、「黨員の全てがそれぞれの地位に付随する権威に服することを了解しており、このヒラエラルキーが最終的には、党の最高メンバーである、大統領につながっていることを承知している」(p. 110—111)。

エスクルディアはPRIと「公権力」との間の関係を選挙時の候補者指名問題にからめて議論しているが、結局彼の見るところでは「党のリーダーのなんびともこの間のメカニズム、すなわちその公権力の真の源泉を説明することはできないであろう」(p. 142)。こうして前述した「小数法則」は、党の最重要機能の一つがいかにたらくかを考えたばあいもあてまるわけである。われわれはこの論稿の最初に挙げた問題から逃れられない。

「体制内からの体制批判」モレノ・サンチェスの著者は現代メキシコの政治システムを批判的に分析した最初の研究の一つである。彼がロペス・マテオス政府の高官であったことを考えれば、その批判は出版当時一層きわだつて見えたにちがいない。「内」に居た人物が「外」に向けて書いたものだといえよう。

「メキシコ社会に潜む深刻な危機が一挙に表面化した」年、一九六八年の熱狂のさなか、モレノは、メキシコを支配する政党とそのもとの政治システムが革命後五〇年以上を経てなお切迫した課題を解決していないことを詰問した。彼が提起した議論は「民主主義とは発展の産物ではありえず、逆に発展のための条件である」(p. 37)

というものであった。経済的民主主義 (una democracia económica) の不存在が、権威主義的・非民主主義的実践にみちた政治的環境” (p. 15) と合わさって国民生活の発展に制約を課していることを強調する。PRIこそこの制約の根源であり、象徴である。党は権力の頂上から操作される機械装置にすぎず、遠い将来はいざしらず、現在のところ発展の主たる阻害要因となっている (p. 15)。また通説とは逆に、党は政治的安定を促進してはいないと主張し、その証拠として政治システムが危殆にひんした一九六八年のケースを挙げる (pp. 38—39)。党が政治的安定を保証するものではないことはメキシコ政治システムにおける権力集中の当然の結果である。そしてこの「政治団体」PRIの機構自体が権力集中の最適例である (p. 45)。PRIは大統領に従属する機関にすぎない。大統領に盲目的に服従していればいいのだから、「党の名目上の指導者がイデオログである必要もないし、知的・道徳的・政治的能力をもつ人物である必要もない」 (p. 55)。党に「独自の識見をもつ」指導者がでないのは当然であろう。党の唯一の機能は服従であり、唯一の価値基準は規律である。

選挙についても「投票さえその効能を失ってきた」という (p. 60)。その威信の主要源泉であった選挙戦においても党は正当性を失ってきたとするのである。

ここで次のように問いうる。それでは何故党はこれまで生き残ってきたのか？ モレノの回答は明確である。「メキシコにおける実質上の単一政党制は重大な偽装の下に維持されている」 (p. 70)。その偽装の一つが、この国には複数政党があると絶えまなく宣伝工作することである。実際にあるのは「民主主義の仮面をかぶったシステムでしかなく、それを支えているのが「唯一の政党」としての役割を担う政府の政治団体であり、これを通してあ

らゆるレベルの選挙操作がなされている”(pp. 70—71)。このように党がきわめて集権的な機関であって、国民生活のすみずみまで影響力を浸透させ (p. 66) しかもそのコントロール機能は対立意見の存在を困難なものにするほど強力なものだとすると、当然 “メキシコには自由な批判的意見はない” ことになる (p. 76)。民主主義とは全く異質な状態が強調されるわけである。

しかし、モレノはこの国が直面している状況——それはかの政治団体が逢着している困難な局面でもあるが——から脱出する方策をも提示している。“二大政党制あるいは複数政党制への道”(p. 117) がそれである。経済成長と並行して社会全体が発展するためには、経済成長と同時に “多元的民主主義” をつくりあげなければならない。モレノ・サンチェスがそう主張した時、現在の政治改革はすでに緒についたのだろうか。

“中産階級の党か党内の中産階級か?” ベルタ・レルネルの論文は十分な資料に基づいた真摯な研究である。しかし、「公党」の発展は中産階級の参加が拡大した結果であるという議論のたてかたには同意できない。このような議論の進め方から、当然、党は中産階級各セクターを中心に構成されたものであるという解釈が出てくる。中産各セクターは利害調整の機能を——著者によれば、充分に——果しており (p. 51)、各セクターからなる党もまた——とくに党のリーダーが中産階級に支持基盤を置いていることを考えれば——同じ機能を果していると考えてよ (p. 55) というわけである。著者自身の言葉でいえば、党の発展過程は中産階級が拡大して権力に接近し、他の階級との利害調整をなしえていることを示している (p. 58)。中産階級の利益を代表するのが全国一般組織連合——党内の一般セクター——であり (p. 78)、これを母体に当選する議員の数は他の二つのセクターである農



民セクター、労働者セクターからの議員の合計を上回っている事実から、一般セクターは他の二つに比べて相対的優位にたっていると考える (p. 80)。

レルネルはまた、党が「新有権者にたいする絶えざるよびかけを行なって効果をあげ、選挙参加を増大させた」ことから、代表選出システムにおいても党はよく機能してきたとする (pp. 84, 85)。選挙参加の拡大が P R I への投票とむすびついていることはこれまでも多くの研究者が示してきており、この点では著者の判断に根拠がある。しかし、中産階級そのものの参加拡大が P R I に有利に働くという著者の一般命題に関しては否定的傾向がみえる。たとえば、これも多くの研究が立証するところだが、P R I への投票は都市よりも農村において多い。逆に反対政党の存在を支えているのが都市票なのである。「中産階級」が基本的には都市化によって生みだされることを考えれば、レルネルの議論にそって中産階級が「政府の党」を支えているとはいえなくなる。

「中流」の社会勢力から成りたっている党は「メキシコの政治構造における主たる安定要因、統合要因」であって、各セクターの要求を代表し伝達する役割を効果的に果してきており、「社会的緊張をときほぐす要因」となっている (p. 93)。そうレルネルは考えている。結局のところ一つのユートピア的見解である。

「P R I と階級支配」ゴンザレス・カサノバの論文はメキシコにおける国家と政党との関係を扱った研究の中でもっとも完べきなものであろう。政治的基盤を見出しえぬまま進められてきた資本主義的発展の問題点をまとめあげようと意図し、それに成功している。彼の分析視角からすれば、党が P R M から P R I に変遷をとげた理由は明らかである。すなわち、この変化は、労働者、大衆の力を弱め、それにかえて党の中央機関を強化し、資本に

利する経済政策を大衆諸セクターと妥協することなく自由に決定できるようにする、そういう目的をもった資本主義的發展の論理的帰結である (p. 50)。PRIは資本による階級支配の用具として生れた。一言でいえば党は資本の下僕である。"階級的連帯さえ喪失させるべく労働者は他の階級、セクターと混合させられた" (p. 50)。労働者とその分派が連帯意識をもった一つの階級として存在すれば、すでにすゝめられていた資本主義的發展が危殆にひんするであろうから。そのうえPRIは"贈収賄・公金横領による腐敗と蓄財が一般化するなかで、抑圧と利益供与を使い分け労働者・農民を服従させた" (p. 51)。実際そう考えないとメキシコがかくも長期にわたって経験してきた経済成長を説明することは困難である。労働者・大衆の要求をおさえこむ抑圧者としてのPRIなくして「安定経済成長」はありえなかつたであろう。再分配の必要性を知らながらもそれにきわめて冷淡な権威主義的・専制的国家体制なくしてもやはりそれは困難であつたらう。

ゴンザレス・カサノバのいうように、"労働運動をも含む全ての政治闘争を管理しうる国家体制がつくりあげられてきた" (p. 51)。反対意見を許容するのは体制自身がそれを育成したばあいに限られ、体制の枠からはみだすものは抑圧してきたのである。ゴンザレス・カサノバの研究に導かれ次のように結論してこの論稿を終えよう。今日メキシコの政治システムは自らの改革に努力している。もしこれが抑圧を低め差別や政治的ごまかしを払拭し民主主義的傾向を拡大することであるのなら、それを肯定的に解釈することができる。しかし、そのばあいでも、PRIの責任であるにせよないにせよとにかく今日までメキシコが経験しえなかつた民主主義的で誇りのある国民生活にむけての第一歩であり、決して最後の歩みではない。

(Lorenzo Meyer, 'Del optimismo a la duda : el PRI visto por los norteamericanos', José Luis Reyna, 'Desde dentro y desde Fuera : el PRI visto por los mexicanos', Nexos. no. 17, marzo 1979. © L. Meyer y J. Luis Reyna)